

競馬術通信 Vol.7

～ハミの選択～

2020年11月

新型コロナウイルスの影響によりヨーロッパでも一時は全ての馬術競技会が中止になり、2020年に開催が予定されていた東京オリンピックも延期になるという前代未聞の事態に見舞われていますが、JRA馬術部門では、引き続き2021年東京オリンピック馬術競技出場に向け、馬場馬術（北原広之・佐渡一毅）と総合馬術（戸本一真）において海外研修を実施しています。馬文化の本場ヨーロッパで更なる高いレベルの騎乗技術を習得し、引き続き日本の競馬関係者の皆様に我々が馬術を通して習得した知識や技術をお伝えできればと思っています。今回の記事は、今年の講習会で講師を務めた戸本一真から、「ハミの選択」というテーマでお送りします。

JRA馬事公苑 戸本一真

これまで様々なテーマで競馬術通信の配信や実馬を用いた講習会を行ってきましたが、今回はこれまで紹介してきた乗り方や馬の状態に対する考え方ではなく、「馬具」について考えていこうと思います。「馬具」と言っても昨今では様々な馬具が開発されており、アスリートであるスポーツホースにとって良いとされるものが次々と生まれてきています。また、従来から使われている道具であっても日々改良が重ねられており、我々の騎乗技術と共に日進月歩を続けています。

日々進化し続ける馬具の中でも今回の競馬術通信では「ハミ」について考えていこうと思います。先に述べたことの繰り返しになってしまいますが、昨今の技術の発展によりハミもありとあらゆるハミが改良・開発され、どれだけの種類や数があるのかということ把握するのは不可能ではないのかと思えるほどのハミが存在します。その一方で、競馬の世界で実際に使用されているハミの種類はそれほど多くはありません。これは「馬に求めることの違い」だと言って間違いないのではないかと思います。つまり、乗用馬には収縮に加えて急ブレーキや急回転が求められるため、それらの要求をより効率よくこなすための補助として様々なハミが使用されています。それに対して競走馬は過度な収縮や急ブレーキ急回転といったことは必要ありません。しかし「競走能力にハミは関係ないのか？」言われれば、決してそうではありません。それでは実際にどういった馬にどういったハミが必要なのかということ踏まえながらハミについて考えていきたいと思っています。

【スポーツホースにとってのハミとはどういった役割なのか？】

まずは「ハミ」の役割について考えていきたいと思います。

競馬・馬術に関わらず、“人が馬に乗る”ということにおいてハミは「ハンドル+ブレーキ」の役割を担っていると言えます。先に述べた「馬に求めることの違い」ということに置き換えれば、乗用馬は左右対称に急回転できるハンドル性能と、トップスピードから一気に減速できるブレーキ性能が必要になります。これに対して競走馬は左右への対称性は求められるものの「急回転」は求められません。また、レース中の折り合いということにおいてブレーキ性能は必須ですが、レース中に急ブレーキを必要とするシーンはほとんどありません。このことから「競走馬に特別なハミは必要ない」という考え方が主流になっているのだと思います。

ハミが「ハンドル+ブレーキ」の役割であるということに念頭に置いて、どういったハミを選択すべきなのか？ということを考えてみると、馬は車や自転車とは違い一頭一頭全て個体差があるということが重要になります。市販されている車や自転車は同じメーカーの部品を使用し、同じ工程で製造されることによって、ハンドルとブレーキの性能に個体差はないといっても過言ではありません。しかし我々のパートナーである馬は100頭いれば100頭の個体差があり、尚且つ馬自身に意思があるため、こちらの指示通りにハンドルやブレーキが機能するとは限りません。つまり、同じハミを使用したとしてもそのハミが別の馬と同じように機能するとは限らず、場合によっては競走能力を阻害する道具にもなりえてしまうということを知る必要があります、個体差に合わせて適切なハミを選択するという事が必須となります。

【何故ハミを選択する必要があるのか？】

ハミがハンドルやブレーキの役割を担い、個体差があるそれぞれの馬に合わせてハミを選択するという事まで分かりましたが、次に個体差に合わせるとはどういうことなのかということ詳しく考えていきたいと思います。前項でハンドルやブレーキ性能には個体差があり、それぞれの馬に合ったハミを選択するという事を説明しましたが、これは「ブレーキ性能の悪い馬には、ブレーキをかけやすいハミを選択する」ということとなります。ここまでは容易に想像がつくことだと思いますが、我々がもう一つ考えなければならないことは「馬が納得してハミを受け入れているか？」ということ。具体的には、ハミが細すぎて（強すぎて）頭を巻き込んでしまったり、金属が口に当たるのを怖がり「空ハミ」のような状態になってしまったりという状態が挙げられます。特に緊張や興奮しやすい性格であるサラブレッドにおいてはこのような状態に陥ってしまう馬が少なくありません。興奮している理由は様々であり、すべての原因がハミだということではありませんが、ハミによって興奮しているケースを見抜き、その馬には太いハミやゴム製のハミを選択することで、問題がいくらか改善されることもあるということです。つまり、ブレーキやアクセルなど強制力が強くなるようなハミを選択するだけでなく、時には強制力が弱くなる、あるいは馬への口当たりが優しくなるようなハミを選択するという事も「ハミを選択する」という意味においてとても重要なことです。

競走馬、乗用馬に限らずハミを選択するという事は「馬を支配する」ということではなく、「パフォーマンスを向上させる」という意味での選択でなくてはなりません。強制力の強いハミにばかり意識がいきがちですが、弱いハミを選択することで騎乗者と馬の関係性が良好になり、お互いが快適に調教を行えるようになれば、そこにパフォーマンス向上の鍵が生まれてくるのではないかと思います。

【ハミ芯の太さに対する違い】

ここからは実際のハミについて説明していきたいと思います。現在ハミの種類は形の違うハミだけでも多数存在します。それに加えてハミ芯の太さや素材の違いなどを掛け合わせれば、数えきれないほどのハミが存在します。また、最近では様々な鼻革も開発されており、「ハミの形×太さ×素材×鼻革」と考えれば、その種類は無限にあるといっても過言ではありません。それら全てのハミの特性を理解し、使い分けることは困難であり無限にあるハミを全て購買して所有しておくことも現実的ではありません。ハミ芯の太さや素材に対する認識をもち、その知識を応用してハミを選択し実際に試してみるとということが大切です。

ハミ芯の太さは、太い方が馬への強制力は弱く馬への影響は少ないといえます。右の写真で言えば一番下のハミが一番太く、一番上のハミが一番細いため、上にいくにつれて強制力の強いハミになっていくことが分かります。

基本的な考え方としては、口への抵抗が強くコントロール性の悪い馬には細いハミを使用し、馬が抵抗してきた時に騎乗者の要求が明確に伝わるようにします。また、一定期間のみ強いハミを使用し馬を100%コントロールすることで、騎乗者と馬との主従関係を構築させ、関係性が良好になったタイミングで元々使っていたハミに戻すという使い方もあります。

その反対に口が軽いいわゆる“空ハミ”と言われる状態になりがちな馬や、口の中で“カチャカチャ”と遊んでしまうタイプの馬はハミに対して何らかのストレスを抱えていることが多く、太いハミを使用して馬が安心してハミに向かって走っていけるような関係性を築くということが効果的です。

ハミに対する理解を深めるうえで、太さの違いによる馬への影響を理解することは第一段階とも言うべき基本的な知識であり、誰もが知っておかなければならない知識だと言えます。自分が騎乗している馬の状態を的確に判断し、口向きが硬い（強い）タイプなのか、軽い（弱い）タイプなのかということ判断し、適切な太さのハミを使用するだけで馬の状態は大きく変わります。口が強い馬には細いハミ、口が軽い馬には太いハミという考え方の先に求めることは「コンタクトを一定に保つ」ということです。ブレーキ性能だけを意識しすぎて細いハミを使用し、スピードが出ていない時は空ハミになっていることに気が付かなければ、馬がハミに向かって正しく走ることができなくなり、本来の走行フォームにも影響を及ぼします。つまり、コンタクトを一定に保つということは、騎乗者と馬が一定の条件の中でお互いが良好な関係を保つということに繋がっているのだと思います。



【ハミ芯の素材に対する違い】

次にハミ芯の素材の違いについて考えたいと思います。ハミ芯は大きく分けて4つの種類に分かれます。写真①にあるように「鉄・銅・プラスチック・ゴム」という種類に分類することができます。さらに「硬いゴム・柔らかいゴム」といったように同じ素材でも強度が違うものや、ハミ芯を革で覆っているような特殊なハミも存在しますが、基本的な種類としては4種類だと言えます。

ハミ芯の素材を知るうえで一番重要なことはハミ芯が硬いほど馬への影響力が強くと、柔らかい素材ほど馬（口）へのあたりは優しいということです。つまり、写真①では一番上の鉄のハミが一番強く、一番下のゴムのハミが弱いということになります。その一方で、ハミの強弱だけにとらわれず、「馬が一番納得してハミを受け入れているのはどの素材なのか」あるいは「ハミ受けが一番安定するのはどの素材なのか」ということを意識しなければなりません。特に口向きが軽くなりすぎるような馬はその原因がどこにあるのかという事を慎重に見極めなければなりません。「この馬は口が軽くて問題がないからとりあえず普通のハミ」という曖昧な選択ではなく、口が軽くなりすぎていないか？コンタクトは一定に保てるのか？ということまで気を配る必要があります。

最近では、写真②のように指の力だけで曲げられるほど柔らかい素材でできたハミや、柔らかいプラスチック素材でできたハミなど特殊なハミも存在し、馬の状態に合わせて幅広くハミを選択することができるようになりました。これらの柔らかい素材でできたハミは、コンタクトを保とうとした時に空ハミになってしまう馬や、ブレーキをかけようとしたときに頭だけを巻き込んでしまうタイプの馬に有効だとされています。これはまさに「ハミを選択する＝馬を支配する」だけではないという考え方に直結しています。ハミが強すぎることによって前進氣勢を失ってしまう馬や、金属が口に当たることを怖がってハミを受け入れられない馬には、柔らかい素材のハミを使うことで問題が緩和されることを期待します。また、基本的な口向きは悪くないものの、ハミが口に当たる最初の瞬間だけ驚くような仕草を見せる馬にも有効的だと考えられます。



写真①



写真②

【最後に】

ハミという言葉をお口にすると「ブレーキ性の向上」「下顎の譲り」といったような、馬を「強制的に支配」するための強い道具だという捉え方をしている人がいるかもしれませんが、これは100%正解だとは言えません。時には強い制御力で口への抵抗を取り除いたり、ブレーキ性の向上を期待したりして影響力の強いハミを選択することもあります。しかし、「ハミを選択する＝馬を支配する」ということではありません。私が考えるハミに対する考え方、つまりハミに期待することはあくまでも「パフォーマンスの向上」だけということです。繰り返してしまっていますが、強制力の強いハミに変えることだけが選択肢なのではなく、弱いハミを選択することで最大のパフォーマンスを発揮するという選択肢も持っていなければならないということです。

また、「根本的な問題の解決は乗り方や調教によって解決すべきだ」という考え方を忘れてはいけません。ハミを変えることで劇的に乗りやすくなることもしばしばですが、それは最終的な手段あるいは最後のひとスパイスにしか過ぎず、その馬が抱える問題に対してハミの選択から取り組みはじめるというのは大きな間違いです。例えばハミへの抵抗が強く下顎を全く譲らない馬がいるとします。その馬に対して強制力の強いハミを使用すれば、その馬は一時的に下顎を譲らざるを得ないという状態になるかもしれませんが、しかし、根本的な問題として「下顎を譲り正しくハミを受け入れる」ということに納得していなければ、その馬は更に強い力でハミに抵抗してくるようになります。以前よりも口が強くなってしまった馬に更に強いハミを使用してしまえば、おそらくその馬は一生ハミを受け入れることはなく、スポーツホースとは思えない怪獣のような口向きになってしまうことでしょう。大切なことは、まず我々自身の乗り方や調教方法に問題はなかったのか？あるいは馬の体調に問題は無いのか？という事を見直し、この馬の問題は何が原因なのかということをしつくり判断するということです。そのうえで問題の原因がハミによるものである、あるいはハミを変えることで根本的な問題解決に向けて取り組みやすくなるという場合においてハミを選択するという考え方が重要だということです。

これはハミに限ったことではなく、すべての道具に関して言えることですが、問題を解決するうえで大切なことは、あくまでも「馬が納得して騎乗者からの要求を受け入れる」ということであり、そのための“きっかけ作り”として影響力の強い道具が必要なのであれば、効果的に使用し問題を解決することは決して悪いことではありません。しかし、問題が起きたからと言って根本的な解決方法を考えずに、全ての問題を道具によって封じ込めるという方法は、根本的な事を何も解決しないばかりか、また新たな問題が生まれてきてしまう恐れもあります。影響力の強い道具こそ、その効果と弊害を理解し問題解決のための「補助」として使用するべきだと思います。

筆者紹介

戸本一真 （ともと かずま）

1983年6月5日生まれ 岐阜県出身
日本中央競馬会 馬事公苑勤務



私は現在馬事公苑の普及課に勤務しており、総合馬術の選手としてイギリスに拠点を置いて活動しています。2006年に競馬会に入会して間もなく、転勤により栗東トレーニング・センター業務課で2年、競馬学校の教育課で1年間、馬術競技とは違った分野での活動をしてきました。その後馬事公苑に戻り障害馬術の選手として本格的に競技会活動を開始。2015年冬には総合馬術への転向を決意し渡英、現在は2021年の東京オリンピックに向けてイギリスのトップライダーである William Fox-Pitt 氏のもとで日々訓練を行っています。ご覧のとおり馬事公苑での活動だけでなく、トレーニング・センターや競馬学校で教官としての経験を経たことにより、馬術の世界だけでなく競馬に携わる方々の様子も知ることができました。また、現役の競走馬で栗東トレセンの坂路と、英国 Newmarket の Warren Hill を走ったことは今でも私の誇りです。トレセンでの調教の様子や、競馬学校での生徒の乗り方や考え方など現場の空気を肌で感じ、私が想像していた以上に厳しい勝負の世界だということを感じましたが、それと同時に向上していく余地がまだまだあるということも感じました。これらの経験と私自身が積み上げた馬術の知識を活かして、私なりに情報を発信していきたいと思っています。しいては日本の競馬界が今後ますます発展していくための一助となれば幸いです。